

CURES

NEWSLETTER

地域経済 ニュースレター

1988.4.15 No. 7

巻頭言

古典派価値理論の一考察

— A. K. DASGUPTA, *Epochs of Economic Theory* を読んで —

前田 敬四郎

こゝで古典学派とは、スミス、リカード、マルクスの3人を総称するが、彼等は皆アグリゲートの問題を取り扱った。然し、そのアグリゲートは異質な財からなる。異質なものを加算するには、お互いを関連付ける共通の尺度を必要とする。そこで、共通の尺度を導出するのに、彼等はどのような工夫をしたか。

スミスは、国富を測る必要から「支配労働」という絶対価値概念から出発した。そして市場を通して、1商品が何単位の支配労働と交換し得るかと言うことに直面し、相対価値概念に進む。市場の価格は、競争によって1つの中心価格に収斂する。その価格を「自然価格」と呼んだ。その商品の自然価格は地代、労働、利潤の3要因費用からなると考える。此処で彼の価値概念は生産要因費用理論となる。

商品の価格は要因費用で決まると考えるが、各要因の価格は独立に決定されると仮定しているので矛盾を孕むことになる。マルクスは「3本の異なる長さの直線を独立に決め、これらの3本の直線を構成要素とし、その総和に等しい第4の直線を作るとする。このことは、1本の与えられた直線を、ある目的のために分割し、3本の異なった部分に分けると同じ方法を意味しない。最初のケースは、3本の直線の総和である直線の長さは、3本の直線の長さと一緒に、完全に变化する。第2のケースは、直線の3つの部分の長さが、始めから与えられた長さの直線の一部と云う事実で制約されている。」と批判する。スミスは、アグリゲーションの処理に失敗したと云える。

リカードは、総利潤P、産出物Q、地代R

- | | | |
|------------------------------|-------|---------|
| ■ 巻頭言 | | 前田 敬四郎 |
| ■ CURES Report | | |
| 「21世紀の都市・景観」 | | 新村 利夫 |
| ■ CURES Salon | | |
| 「『ヒルファディングと現代資本主義』の出版を振り返って」 | | 上 条 勇 |
| ■ Topic | | |
| 「西洋古典資料整理講習参加記」 | | 城 山 美和子 |
| ■ Information Processing | | |
| 「ファジィ理論の実用化はじまる」 | | 前 田 隆 |
| ■ 地域経済文献情報 | | |

賃金 W 、利潤率 γ とすれば、 $P = Q - (R + W)$ 、 $\gamma = P/W$ と云う1商品（穀物）によって示されるモデルから出発する。このモデルのなかでは、すべての存在体が同質であるので、加減乗除は自由に行われる。然し、彼の理論が異質な財を含んだ一般モデルに進む時、問題に遭遇する。彼の「価値論」の冒頭で「1商品の価値、若しくは、これと交換されるべき他の商品の数量は、その生産に必要な相対的労働量によって定まり、その労働に対して支払われる報償の多寡によって定まるものではない。」と述べ、交換価値という相対価値概念より出発する。この理論を支えるために3要因生産構造を1要因モデルに誘導する工夫を行う。生産の限界概念を用いることによって、先づ、地代要因を除き、更に、資本は「蓄積された労働」と考え、労働だけの1要因モデルに還元する。但し、そのモデルは、労働と資本の割合が各産業で同一であるという制約を持つ。この制約下では、商品の相対価格は、そのなかに具象化された相対的労働量に等しい。従って、利潤を構成する財が賃金を構成する財と比較出来る1つの指数を持つ。 $\gamma = \frac{P}{W}$ 。すべての産業で賃金が騰貴する時、相対価格は影響せず利潤率は下落する。労働と資本の割合は不変であるが、要因価格の割合は変化する。然しながら、現実には各商品生産で労働と資本の比率は等しくない。このことから、商品の相対価格は労働の相対量から乖離する。自由競争は、各産業における賃金率、利潤率の一様性を保証するので、賃金の一様な騰貴は、労働に対し資本の割合が高い商品の価格を下げ、相対的に低い商品の価格を上げ、交換価値を変化させる。この不思議な効果を見出し、産出物の集計価値が、賃金、利潤の変化に対して不変である基準を求めようとする。そこで、労働と資本の割合が、全産業のなかで平均となるような生産環境の1商品を基準に採用する。この基準に関し、労働一資本の

比率が高い処で価格は低く、それが低い処で価格は高い。然し、平均価格水準は不変に残る。

マルクスは、商品の価値が「具象化された労働量」で示される絶対価値から出発し、「価値体系」と「価格体系」の二つのシステムを持つ。価値は「本質」で価格は「現象形態」に過ぎない。1商品の価格は、その費用価格に経済全体の平均利潤率を加えたもので、利潤率を「不変資本+可変資本」に対する剰余価値で定義する。可変資本に対する剰余価値をその儘に残せば、1産業の利潤率は不変資本に依存し、相対価格が相対価値に一致する場合に比し、資本の有機的構成が高い産業で利潤率はより低く、その構成が高い産業で利潤率はより高い。然しながら、市場の競争を通して各産業の利潤率は等しくなると考えるから、相対価格は相対価値から乖離するようになる。要するに、平均より高い有機的構成を持つ商品価格は価値より大きく、平均以下の有機的構成を持つ商品の価格は価値より小さく、各産業の有機的構成が同一である特殊な仮定の下では、相対価格は相対価値に等しい。彼は各商品の費用価格に平均利潤率を加えることによって価値を価格に変換する。資本の有機的構成の多様性から生ずる商品の価値と価格の乖離は、総体では消滅する。すなわち、商品価値の集計は、商品価格の集計に等しい。

リカードとマルクスは、資本一労働の構成割合が、全産業で正規分布すると仮定したことは相似している。然し、マルクスが絶対価値概念から出発し、「剰余」を価値体系のなかに組込んだのに対し、リカードは相対価値概念からスタートし、利潤を産出物から地代、賃金を引いた残余と動学的に考えた点で大きな相異がある。その結果、リカードの商品価格の総計は、「具象化された労働量+利潤」となる。

（金沢大学経済学部教授）